

香り

香 / 薫 / 馨

smell

scent

aroma

fragrance

perfume

日本で「香」が用いられるようになったのは仏教伝来の六世紀、特別の芳香に神秘を感じて、病気や危険から身を守り願いを叶えてくれるものとして、又その香りを祈りに使ってきました。

595年夏、淡路島に漂着した一本の木を大和の帝に献上された時、聖徳太子はそれを香木沈香であると見抜いたと「日本書紀」に記述されています。

キリスト教ではイエス・キリストの誕生を祝って東方の三博士が当時最も貴重なる黄金と香料の乳香（にゅうこう＝ヨーロッパではマリアの涙と呼ぶ）と没薬（もつやく・ミルラ＝香りの良い強い防腐剤でミイラの製作に使用）の三つを捧げました。

エジプト女王クレオパトラはバラの香水風呂に入り湯上がりの肌には香油を擦り込んでいたとか。

奈良時代の東大寺や法隆寺など大寺院では主に仏前を浄め、邪気を払う「供香くこう・そなえこう」は香料を香炉の火種で焚いたり、仏像や修行者の身に塗る塗香など、仏教文化の中で受けられました。鑑真和上来日は仏教の戒律と共にたくさんの香薬と香の配合技術も伝えたそうです。

平安時代、唐の教養を学んだ貴族たちは仏のための供香だけでなく、日常生活の中でも香りを楽しむようになりました。香料を複雑に練り合わせ、香気を楽しむ「薫物・たきもの」や貴族たちは自ら調合した薫物を炭火でくゆらせ、部屋や衣服への「移香」を楽しみました。平安時代の王朝文学『枕草子』や『源氏物語』には香の記述が多く、宮中に御香所というものが設けられました。

鎌倉時代、武士が台頭し禅宗が広まると、香木そのものと向き合い、一木の香りをきわめようとする精神性が尊ばれます。この頃に香木の香りを繊細に鑑賞する「聞香」の方法が確立されました。茶の湯や立花、香も室町時代の將軍・足利義政の東山文化が花開きました。東大寺正倉院に伝世する香木「蘭奢待（らんじゃたい）」は足利義満、織田信長らが切り取った話は有名で、正親町天皇は「聖代の余薫」と明治天皇は「古めきしずか」と歌われました。

江戸時代、元禄以降は経済力をもった町人にも香文化が広まり、男性の教養のひとつで、志野流の門人帳には女性は一割位だったようです。「組香」の創作や、それを楽しむために優れた香道具が作られました。香を鑑賞するための作法が整えられ、香は「道」として確立。一方、中国からお線香の製造技術が伝わり、庶民の間にもお線香の使用が浸透していきます。十四世紀の京都で「茶香十炷の寄合」が流行り、茶席では冬季の炉には練香を夏季の風呂釜には香木が使い分けられて、現在に至っています。

西洋医学が伝わった際に精油（植物の花や葉、木部、果皮、樹皮、根、種子、樹脂などに含まれる天然の液体）を用いた医療が伝わり、精油を薬として利用。時代の変遷に伴い、現代の日本人の暮らしにあった香り文化はアロマセラピー学として薬理学、臭覚の生理学、心理学、精神科学、内科学、皮膚科学などの西洋医学の立場からもさらに研究されています。

アロマセラピーという言葉は、フランスの調香師ルネ＝モーリス・ガットフォセが自らのやけどを治したラベンダーの優れた治癒力に魅了され、1937年に『アロマセラピー』を著しアロマ（芳香）とセラピー（療法）を組み合わせ芳香療法をつくりました。100%植物から抽出された「精油＝エッセンシャルオイル」を利用するのが特徴で、リラックス効果、体調不良の改善、心身の強壮など、精油の種類によって様々な効果が得られると言われています。アロマは口と鼻の両方から入る感覚で、鼻だけならばパーフューム（perfume）、口から入るものにはフレーバー（flavor）という言葉を使います。

アロマセラピーのエピソード

17世紀にペストが大流行した南フランスでペスト患者の死体から金品を盗んでいた4人組の泥棒が捕まりました。泥棒に死刑を免除するのと引き換えに、ペストにかからなかった秘密を明かさせると、ローズマリー、タイム、セージ、ラベンダー、ミントetcのハーブを酢に漬けて作った殺菌効果の高いハーブビネガーを全身に塗っていたからとのことでした。